

ネーションと戦争——平和の現代的諸構想について

渡辺 憲正（関東学院大学）

ガルトゥングは、周知のように、平和をさしあたり「暴力の不在」として理解し、暴力をさらに個人的（＝直接的）暴力と構造的（＝間接的）暴力とに分けて、それぞれの不在に対応させて消極的平和と積極的平和を構想している。平和はさしあたり、構造的暴力の一形態たる戦争の廃棄として考察されなければならない。

戦争は歴史とともに古いとはいえ、近代的ネーションが形成されるに至って、意味を変えた。それゆえ、現代において「平和」を構想するにあたり、まず論じられるべきは、ネーションの性格である。ネーションとは何か。ネーション形成は戦争といかに関わっていたのか。グローバル化時代における「国民国家の相対化」は、戦争の歴史をいかに変えるのか。ネーションに関わるこれらの問題を考察し、近代の「平和の思想史」をも回顧した上で、今日的な「平和の構想」について考える。

ネーション形成は、16世紀から19世紀に及ぶ長期の過程である。ネーション形成の時期を次のように区分する。

- 1) 絶対王政期における先進的ネーション形成（16世紀～18世紀前半）
- 2) 市民革命以後におけるネーション形成（18世紀後半～19世紀）

まず、絶対王政期における先進的ネーション形成の特色は何か。先進的ネーション（スペイン、オランダ、イギリス、フランス等）の形成にあたっては、一般に、(1)封建的な身分制度の解体と王権／ブルジョア的商人層の伸張、(2)宗教改革／宗教戦争、(3)国家（王国）形成と議会制度の整備、(4)領土の確定、(5)周辺少数民族の統合、(6)貨幣と度量衡の統一：商業と工業の振興、(7)重商主義による富国政策と植民地形成、(8)国民語の形成、等の過程が見られる。

市民革命以後におけるネーション形成は、絶対王政期とは異なる徴表をもっている。先進ネーションはますます制度的に整備され、いわゆる「近代市民社会」を形成すると同時に「国民帝国」を築くに至るが、およそ次のような諸過程を含む。(1)国民経済の形成と資本主義の成立、(2)外国貿易と植民地の開拓→「国民帝国」形成、(3)交通革命、(4)市民革命による政治的国家の形成と政党政治、(5)「人間」の権利を基礎とした法体系の形成、(6)常備軍（徴兵制）の設置、(7)国民教育制度の整備、(8)国民文化形成。

以上をまとめると、重要なのは、ネーション形成過程全体が対立・抗争をもち、それぞれが戦争・内戦の契機を胚胎することである。すなわちネーションは、そもそも内外に、

- 1) 支配者層の間の対立
- 2) 支配者層と被支配者層の対立
- 3) 支配的民族と周辺少数民族の対立

- 4) 他のネーションとの対抗
- 5) 古い帝国との対立
- 6) 植民地化した諸民族との対立

をもって存在し、いずれも戦争や紛争になって現れる契機となる。ネーションは最初からこれらの対立を抱え込み、したがって本来的に暴力や武力をもって、内戦、戦争の手段によって解決をはかった。

ネーションの歴史を、次の4段階に分ける。ネーションの歴史は戦争の歴史でもあり、それゆえにそれぞれの時期に、ネーションのあり方に対応して、戦争が起こる。これを類型化してとらえることにする。

- 1) 絶対王政期 (16世紀～18世紀前半)
- 2) 近代市民社会確立期 (18世紀後半～19世紀)
- 3) 帝国主義期 (19世紀末～20世紀前半)
- 4) 国民国家の時代 (20世紀後半～)

これらの節では、各時期について次のような論点を設定し、概括的に考察する。

- ◇開戦はどのようにしてなされたのか。誰が戦争を決定したのか。
- ◇誰が戦費の調達を行ったのか。どれほどの負担であったのか。
- ◇議会はどのような構成になっていたのか。戦争にどう関わったか。
- ◇じっさいに戦争を担ったのは誰か。
- ◇戦争の形態はどのようなものであったか。どう変化したか。
- ◇戦争の法的根拠は何であったか。

「国民国家の相対化」と言われる中で、今日、ネーションは戦争とどう関わりをもって
いるか。「新しい戦争」論(カルドー等)は、グローバル化とともに「新しいタイプの組織
的暴力」が生まれることを指摘している。たしかに、戦争が国家間戦争という形態を採ら
ず、非正規戦争や内戦、テロなどの形態をとるかぎり、これまでにない特徴をもつ戦争が
生まれていることは疑いない。しかし同時に、国民国家の帝国が支配を継続していること
も指摘しなければ、問題の核心に迫ることはできないのではあるまいか。

報告者としては、可能なかぎり現代の平和構想から学ぶことを通して、現代のネーション
の暴力的抑圧構造を廃棄する諸構想を考察したい。